

平成25年度かながわの遺跡展・巡回展

地中に埋もれた

Excavated Livingware of Edo Period in KANAGAWA

—かながわの町と村の暮らしぶり—

江

戸

時代の道具たち



神奈川県教育委員会

神奈川県立歴史博物館

秦野市教育委員会

ごあいさつ

神奈川県では、数十年前から多くの発掘調査を実施している小田原城内・城下をはじめとして、近年では、宿場町の藤沢市藤沢宿や箱根町の箱根関所、海老名市社家宇治山遺跡や厚木市城 際遺跡などの近世集落の発掘調査が実施されて、その成果が明らかになってきました。

それらの発掘調査の結果、地下に埋もれていた多種多様な道具が発見され、当時の町・村の生活を彷彿とさせる内容でした。それは、陶磁器・土製品・石製品・金属製品・銭貨と多岐にわたり、まれに遺存しにくい漆器や木製品も出土することもあります。江戸時代の町や村の暮らしは、このような様々な生活道具を日常の場面・場面で使いこなし、成り立っていたのです。今回の展示では、遺跡から出土した多種多様な生活道具を「食べる」「装う」「祈る」「遊ぶ」「働く」などと用途別に展示し、江戸時代におけるかながわの町・村の人々の暮らしぶりを紹介します。

神奈川県教育委員会
神奈川県立歴史博物館
秦野市教育委員会

目次

かながわの江戸時代と遺跡・出土品・・・1

I部 様々な江戸時代の道具たち

- 一、「食べる」・・・3
- 二、「調理する」・・・11
- 三、「住まう」・・・13
- 四、「装う」・・・15
- 五、「祈る」・・・16
- 六、「学ぶ」・・・17
- 七、「遊ぶ」・・・18
- 八、「働く」・・・20

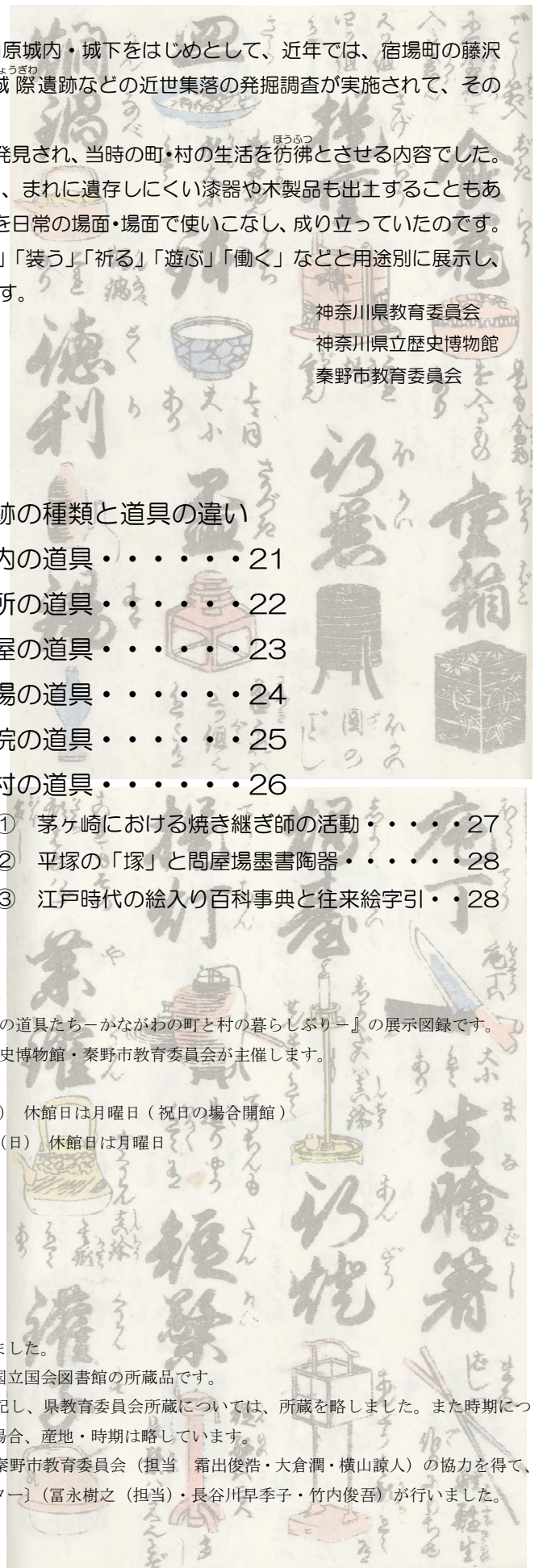
II部 遺跡の種類と道具の違い

- 一、城内の道具・・・21
- 二、関所の道具・・・22
- 三、陣屋の道具・・・23
- 四、宿場の道具・・・24
- 五、寺院の道具・・・25
- 六、農村の道具・・・26

- トピックス① 茅ヶ崎における焼き継ぎ師の活動・・・27
- トピックス② 平塚の「塚」と問屋場墨書陶器・・・28
- トピックス③ 江戸時代の絵入り百科事典と往来絵字引・・・28

例言

- 本冊子は、平成25年度かながわの遺跡展・巡回展『地中に埋もれた江戸時代の道具たちーかながわの町と村の暮らしぶりー』の展示図録です。
- 本展は、神奈川県教育委員会（神奈川県埋蔵文化財センター）・神奈川県立歴史博物館・秦野市教育委員会が主催します。
- 展示会場と会期は次のとおりです。
 - 遺跡展 神奈川県立歴史博物館 平成26年1月11日（土）～2月23日（日） 休館日は月曜日（祝日の場合開館）
 - 巡回展 秦野市立桜土手古墳展示館 平成26年3月1日（土）～3月23日（日） 休館日は月曜日
- 会期中、講演会と展示解説を次のとおり行います。
 - 遺跡展講演会 神奈川県立歴史博物館 講堂
 - 第1回 1月19日（日） 東京大学准教授 堀内秀樹氏
 - 第2回 2月15日（土） 早稲田大学教授 谷川章雄氏
 - 巡回展講演会 秦野市立桜土手古墳展示館 映像室
 - 3月8日（土） 小田原市文化財課副課長 山口剛志氏
- ポスター・図録表紙等の写真撮影は加藤芳明氏（かとう写真館）にお願いしました。
- 掲載の浮世絵は全て神奈川県立歴史博物館の所蔵です。守貞謄稿については国立国会図書館の所蔵品です。
- 図録の出土品写真のキャプションは、品名・産地・時期・出土遺跡・所蔵を記し、県教育委員会所蔵については、所蔵を略しました。また時期については江戸時代を三時期に大別し、前期・中期・後期と記しました。不明な場合、産地・時期は略しています。
- 企画・図録の作成は、神奈川県立歴史博物館（担当 古宮雅明・伊藤瑞湖）、秦野市教育委員会（担当 霜出俊浩・大倉潤・横山諒人）の協力を得て、神奈川県教育委員会文化遺産課中村町駐在事務所〔神奈川県埋蔵文化財センター〕（富永樹之（担当）・長谷川早季子・竹内俊吾）が行いました。
- 表紙写真：県内各地の近世遺跡出土品 表紙裏写真：「商売往来絵字引」から



かながわの江戸時代と遺跡・出土品

江戸時代、神奈川県域（相模国と武蔵国の一部 以下「かながわ」とする）については、幕府直轄地・旗本領・大名領が入りくむ形となっている。大名領については、小田原藩の他は、他国の藩の飛地が多く、忍藩の松平領、前橋藩の酒井領、三河中島藩の板倉領、烏山藩の大久保領などが確認される。また江戸時代に整備された五街道のうち、東海道と甲州街道が県内を横切っており、東海道の九宿と甲州街道の四宿が宿場として整備されている。特に東海道については往来も多く、宿場町が発達した。また、東海道には箱根関所が設けられ、関所の代表的なものとして著名である。他にも脇街道として矢倉沢往還や中原往還なども通り、矢倉沢往還は大山道のひとつとしてよく知られている。さらに漁業が盛んな上、海上交通も多く、港が各地に展開する。江ノ島・大山・鎌倉などは参詣・観光の地として、当時から人気があり、門前町を形成する場合もあった。このようにかながわには、農村・漁村・山村の他、小田原の城下町や宿場町、港町、門前町などが賑わいを見せていたのである。

さて、これらの当時の生活域のうち、遺跡として残っており、地域として必要なものに関しては、開発にともない、かながわでも今から約三十年ほど前から発掘調査される事例が増えてきた。小田原城内・城下町は、過去数十年の調査実績があり、近年の御用米曲輪の調査など多くの成果を挙げている。宿場町としては、小田原宿の他に、藤沢宿の発掘調査が近年注目されている。東海道の「間の宿」である原宿遺跡、矢倉沢往還の厚木宿についても調査が実施されている。また、箱根関所についても史跡整備のための発掘調査が行われた。陣屋については、相模原市の守屋左太夫陣屋跡、烏山藩厚木役所の調査事例がある。農村については、横浜市西ノ谷遺跡、逗子市池子遺跡群、海老名市社家宇治山遺跡などが挙げられる。山間部の農村については、清川村の宮ヶ瀬遺跡群で江戸時代の村の広範囲にわたる発掘調査を実施しており、多数の遺構を検出している。

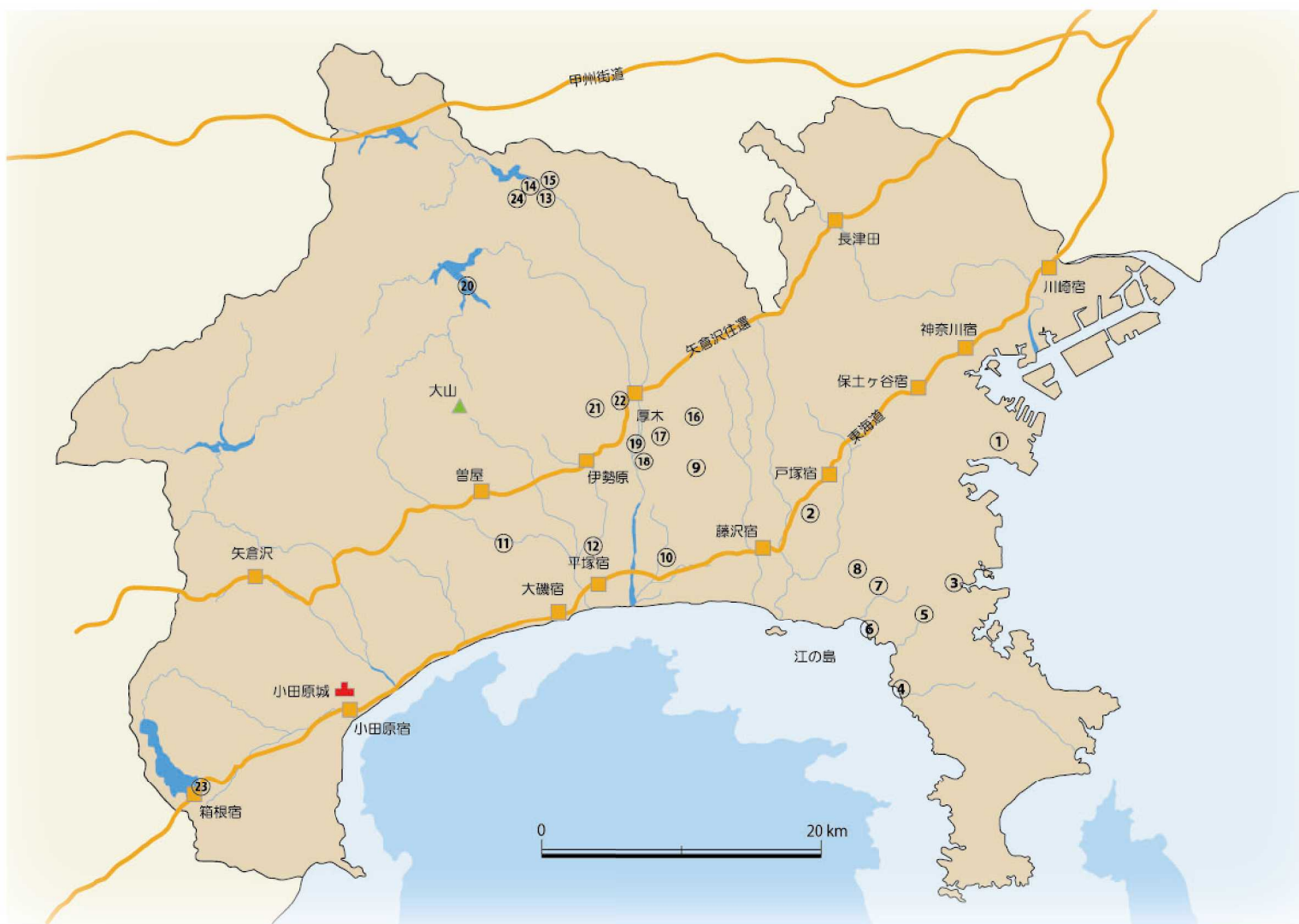
また江戸時代の宗教施設、富士塚や墓跡についての調査も実施されているが、近年では、横須賀市の向井将監正方夫妻墓の調査は江戸時代前期の記録が残る旗本の埋葬型式を明らかにした。



相模原市代官守屋左太夫陣屋跡 大型礎石建物

このようなかながわの近世遺跡では、様々な出土品、つまり当時の「道具」が出土するが、多種多様であり、当時の生活を支えていた道具がいかに多かったかよくわかる。用途の分類に際しては、考古学的に先進している東京の江戸遺跡研究に拠るところは大きい。例えば『江戸考古学研究辞典』では生活文化（主に遺物の説明部分）の章立てを食文化、喫茶・飲酒・喫煙、衣文化、調度・文具、遊び、信仰と祭祀、さまざまな道具（工具・武具など）などとしている。かながわで出土した「道具」類についても、ほぼ同様な分類が可能である。ただし、量的に江戸遺跡よりかなり少なく、特に都市部・街道沿いを離れるとその傾向は著しい。

第Ⅰ部では用途別に道具を「食べる」「調理する」「住まう」「装う」「祈る」「学ぶ」「遊ぶ」「働く」に分けて紹介し、江戸時代におけるかながわの町・村の人々の暮らしぶりを紹介する。第Ⅱ部では遺跡の種類ごとに出土する「道具」の差や特徴を見ることで、場所による当時の人々の活動の違いを明らかにしたい。



【主な掲載遺跡位置と街道】

- ①横浜市本牧荒井横穴墓、②横浜市原宿町遺跡、③横浜市上行寺裏遺跡、④葉山町三ヶ岡遺跡、⑤逗子市池子遺跡群
- ⑥逗子市正覚寺やぐら群、⑦鎌倉市西御門東やぐら群、⑧鎌倉市円覚寺旧境内遺跡、⑨藤沢市用田鳥居前遺跡
- ⑩茅ヶ崎市上ノ町・広町遺跡、⑪平塚市原口遺跡、⑫平塚市神明久保遺跡、⑬相模原市小保戸遺跡、⑭相模原市津久井城跡馬込地区
- ⑮相模原市川尻遺跡、⑯綾瀬市宮久保遺跡、⑰海老名市社家宇治山遺跡、⑱海老名市跡堀遺跡、⑲厚木市城際遺跡
- ⑳清川村馬場遺跡・表の屋敷遺跡・北原遺跡・長福寺跡（宮ヶ瀬遺跡群）、㉑伊勢原市上粕屋・上尾崎遺跡
- ㉒伊勢原市東富岡・南三間・北三間遺跡、㉓箱根関所、㉔相模原市代官守屋左太夫陣屋跡

※小田原市の遺跡は「小田原城・小田原宿」とほぼ同じ位置であり、平塚市寺ノ脇古墳は「平塚宿」、藤沢市No. 78 遺跡は「藤沢宿」、厚木市横町遺跡・東町遺跡、烏山藩厚木役所は「厚木」と同じ位置のため、略した。

I部 様々な江戸時代の道具たち

一、「食べる」

江戸時代の遺跡では、多くの場合、一般的な遺物として陶磁器が出土する。特に食器の「碗」「皿」類が多く、いかに当時、食文化に比重が置かれていたかがよくわかる。ほかにも「鉢」「土瓶」「徳利」「盃」など器種が多様化し、近現代により近い食器構成ができあがりつつあったことがわかる。



染付唐獅子文大鉢 肥前系 後期 小田原市中宿遺跡 小田原市教育委員会

●大皿・大鉢

城下町や宿場、屋敷地などでは大皿や大鉢、高価な食器が出土することがあり、身分の高い武士や豪商、土豪の屋敷、料理屋などで使用されていたと考えられる。



染付飛鳥文大鉢 肥前系 後期 小田原城三の丸東堀 小田原市教育委員会



染付蛸唐草文大皿 肥前系 後期 伊勢原市上粕屋・上尾崎遺跡



陶器黄瀬戸大鉢 瀬戸・美濃 前期 清川村馬場遺跡



染付唐花文大皿 肥前系 後期 茅ヶ崎市上ノ町・広町遺跡 茅ヶ崎市教育委員会



染付矢車花文皿 鍋島 中期 小田原市杉浦平太夫邸跡 小田原市教育委員会

右下の浮世絵では座敷での宴席が描かれているが、染付・青磁・漆器の大皿・大鉢が中心をしめている。このような料理屋の宴席の他、屋敷における祭礼や人生儀礼の「ハレ」の場（※ハレとは非日常的な行事・祭りのこと）、接待・供応の場などで用いられたのであろう。これらの大皿・大鉢は染付・青磁が非常に多く、伊万里焼（肥前系磁器）が大半である。まれに色絵も存在するが、今回は良好な資料が提示できなかった。陶器は瀬戸・美濃焼、唐津焼などが散見される。



染付山水文大皿 肥前系 後期
小田原市中宿遺跡 小田原市教育委員会



大皿・大鉢を使った宴席
忠臣蔵七段目（部分） 歌川広重（初代）



染付牡丹文大皿 肥前系 後期
厚木市横町遺跡 厚木市教育委員会



染付唐花文大鉢 肥前系 後期
小田原市本町遺跡 小田原市教育委員会



染付楼閣文大皿 肥前系 後期
小田原市欄干橋町遺跡 小田原市教育委員会

●当時の食事

左と下に示したのは、当時の食事を復元したものである。漆器・木製品は出土品ではなく、近年のもので代用している。家族が同じ食卓を囲むちゃぶ台などはまだ存在せず、個々に膳を持つ。左は、地域で身分の高い階層の食膳、^{しゃし}奢侈な食膳①、下は庶民の食膳②・③である。①は飯碗も漆器の場合が多い。②は箱膳といって、食事の後、器を個々に洗って膳の中^{かぶ}にしまうものである。③はかなり質素な内容で粥と漬け物で、雑穀などが主食になることもある。農村ではこのような食事^{かぶ}も多かったことと考えられる。この場合、器も染付の粗製品、安価な陶器、木器等である。



復元食膳①



復元食膳②（庶民）



復元食膳②の食器収納



復元食膳③（庶民）

●碗について

本県の江戸時代の遺跡で出土する陶磁器で一番多く出土するのが「碗」類である。他の器種も同様だが、磁器（青磁や染付 硬質で白色）のもの^{ゆうやく}と陶器（表面に釉薬 やや軟質 灰褐色・灰色）にわかれる。現代では、飯を盛る碗（ご飯茶碗）とせん茶・湯を入れる碗（湯飲み）などに大別されるが、江戸時代については、喫茶の仕方が時期により変化することもあり、碗の使用^{ゆうやく}方法について不明確な所がある。例えば碗①については飯を入れたか、茶を入れたか、両方なのかよくわからない。しかしながら③については「くらわんか」茶碗と称する量



碗① 染付網目碗 肥前系 前期
海老名市社家宇治山遺跡



碗② 染付山水文碗 肥前系 前期
小田原市杉浦平太夫邸跡



碗③ 染付雪輪梅樹文碗（くらわんか茶碗）
肥前系 中期 清川村馬場遺跡

産化した粗製の飯碗である。④～⑥も飯碗と考えられ、⑤は茶漬け・湯漬けによく用いられるため、蓋がついている。⑦～⑫は形態から湯または茶を入れた碗であろう。⑨は雪の中、親のために筍を探し当てた孟子の孝行話を染付した碗、⑩は色絵の碗で、色絵は一般的にやや高価な製品である。⑪はよろい手、⑫は「長の」と称される瀬戸・美濃窯の碗で同様の形状のものは各地で出土している。



碗④ 染付碗 (広東碗) 肥前系 後期
小田原城跡八幡山遺構群



碗⑤ 染付・青磁染付碗 (蓋付碗) 肥前系 後期
海老名市跡堀遺跡他



碗⑥ 陶器刷毛目碗 瀬戸・美濃 後期
清川村馬場遺跡



碗⑦ 染付花文碗 肥前系 後期
清川村馬場遺跡



碗⑧ 染付碗 関西系 後期
小田原城跡八幡山遺構群



碗⑨ 染付孟子筍取り文碗 肥前系 後期
清川村馬場遺跡



碗⑩ 色絵花文碗 肥前系 後期
相模原市小保戸遺跡



碗⑪ 陶器碗 (鎧茶碗) 瀬戸・美濃 後期
清川村馬場遺跡



碗⑫ 陶器梅花文碗 (長の) 瀬戸・美濃 後期
清川村馬場遺跡

●皿について

東京の江戸遺跡出土の皿を分析した伊藤末子氏によると(伊藤末子 2001)、皿はおおまかに「小の皿」「中の皿」「大の皿」「特大の皿」に分けられる。「中の皿」は今のケーキ皿程度の大きさだが、一番出土量が多いという。その傾向は神奈川県でも同様である。「当時の食事」でも見たように、個人ごとの膳が主体の当時としては、一人のおかずをのせるちょうどいいサイズといえる。写真では③・④・⑦などが該当する。④は染付でも粗製のもの。①・②は伊万里焼でも生産がはじまった頃の「初期伊万里」の皿。染付の色が淡く、乳白色の釉調が特徴である。⑤は茶陶に近い絵唐津の皿。⑧は、瀬戸の石皿と俗称される皿で、庶民が煮しめや煮物などをのせたやや大きめの皿。



皿① 染付ざくろ文皿 (初期伊万里)
肥前系 前期 清川村馬場遺跡



皿② 染付月兎文皿 (初期伊万里)
肥前系 前期 相模原市津久井城跡馬込地区



皿③ 染付松樹文皿
肥前系 中期 清川村馬場遺跡



皿④ 染付草花文皿
肥前系 (波佐見) 中期 清川村馬場遺跡



皿⑤ 陶器絵唐津皿 肥前系 前期
小田原市杉浦平太夫邸跡 小田原市教育委員会



皿⑥ 陶器御深井釉木瓜皿
瀬戸・美濃 中期
相模原市津久井城跡馬込地区



伊万里焼 (肥前系染付) の焼成
山海名産尽 肥前国伊万里焼 (部分) 歌川国芳



皿⑦ 陶器灰釉菊皿
瀬戸・美濃 前期
海老名市杜家宇治山遺跡



皿⑧ 陶器皿 (石皿)
瀬戸・美濃 後期
厚木市横町遺跡 厚木市教育委員会

●漆器

漆器は、陶磁器と共に食器として多く用いられていたが、神奈川では木製品が遺存するケースはあまり多くないため、出土例は少ない。江戸時代に入るとそれまで無かった蓋付き椀が成立し、基本として器高・高台が高めの「飯椀」や器高が低めで口径が広い「汁椀」などが確認される。



漆椀
小田原市杉浦平太夫邸跡 小田原市教育委員会



漆椀
小田原市杉浦平太夫邸跡 小田原市教育委員会



漆椀
海老名市社家宇治山遺跡



漆椀
小田原城跡三の丸東堀 小田原市教育委員会



漆椀
社家宇治山遺跡



漆椀
小田原城跡三の丸東堀 小田原市教育委員会



鉢① 染付鉢 肥前系 後期
小田原市欄干橋町遺跡 小田原市教育委員会

●鉢

鉢類は染付では角鉢なども確認される。②の猪口は現在ではそば猪口としてそば汁をつける器だが、当時は、簡素な料理・つまみを入れる向付け・小鉢としての役割も果たしていた。③は志野織部の向付け。④は大黒が陽刻された瀬戸・美濃焼の鉢。



鉢② 染付格子文猪口 肥前系 後期
逗子市正覚寺やぐら群



鉢③ 陶器志野織部向付け 美濃 前期
小田原市欄干橋町遺跡 小田原市教育委員会



鉢④ 陶器鉄釉大黒文鉢 瀬戸・美濃
厚木市城際遺跡

●その他の「食べる」道具

他にも重箱のように使った可能性がある段重（化粧道具とする考え方もある）、箸、盃台などがある。土鍋・行平は調理道具にも分類できるが、江戸時代後期、座敷での鍋料理の流行にともなうものと考えられるため、「食べる」道具とした。同じ頃、出現した散蓮華は、卓袱料理とともに中国から導入されたものだが、鍋料理とも関係すると考えられる。土瓶については茶を煮て飲む喫茶方法が江戸時代後期から流行したため、広まったと考えられる。



箸
小田原市筋違橋町遺跡 小田原市教育委員会



染付山水文盃台 肥前系 後期
藤沢市No. 78 遺跡 藤沢市教育委員会



染付蛸唐草文段重 肥前系 後期
伊勢原市上粕屋・上尾崎遺跡



陶器行平 後期
小田原市欄干橋町遺跡 小田原市教育委員会



陶器鉄釉鍋 後期
小田原市欄干橋町遺跡 小田原市教育委員会



染付松葉文散蓮華 後期
小田原市欄干橋町遺跡 小田原市教育委員会



陶器土瓶 後期
厚木市城際遺跡



陶器鉄釉土瓶 後期
伊勢原市東富岡・南三間遺跡



陶器土瓶 後期
清川村表ノ屋敷遺跡

●酒の器

さかづき とっくり
 盃と徳利は共に酒以外の飲料にも使用したため、酒の消費の実態についてはまだわからないことも多いが、県内の遺跡では盃・徳利の出土がある程度確認される。神奈川において飲酒の習慣がかなり広まっていた可能性は高い。ただし、東京の江戸遺跡で大量に出土する「貧乏徳利」(中段左写真)は、通い徳利(酒店で貸出した容器)であるが、神奈川では数は少なめである。酒屋の分布や人口もさることながら武士の居住がそれほど多くないことも一因だろう。中段の写真にあるチロリは酒を爛^{かん}する容器であるが、次第に爛徳利が主体となる。盃洗^{はいせん}は、当時の宴席で、ひとつの盃で献杯^{けんぱい}しあうことが流行したため、盃をその場で洗う器である。



陶器爛徳利・染付爛徳利
 後期 相模原市小保戸遺跡



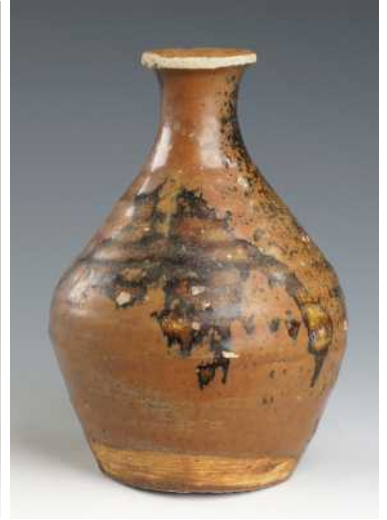
染付瓶(「さけ入」染付)
 大久保弥六郎邸跡 小田原市教育委員会



陶器鎧徳利 瀬戸・美濃 後期
 逗子市池子遺跡群 逗子市教育委員会



陶器鉄釉徳利 瀬戸・美濃 前期
 清川村馬場遺跡



陶器鉄釉灰釉流し掛け
 瀬戸・美濃 前期 逗子市正覚寺やぐら群



陶器灰釉徳利(貧乏徳利) 染付山水文チロリ 肥前系 後期
 瀬戸・美濃 中～後期 清川村馬場遺跡 小田原市中宿町遺跡 小田原市教育委員会



染付盃・陶器盃 中～後期
 相模原市小保戸遺跡他

染付蝶花文小杯 肥前系 前期
 小田原市杉浦平太夫邸跡



染付盃洗 肥前系 後期 宴席で一つの盃を飲み回す際に洗う器
 小田原市杉浦平太夫邸跡 小田原市教育委員会



爛徳利・盃洗のある花見 十二月の內衣更着梅見(部分) 歌川豊国(三代)

二、「調理する」

当時の台所には、多くの道具が存在していた。写真で示したように煮炊きの道具（鉄鍋・焙烙・手焙烙）、食べ物を切る・おろす・搗る道具（包丁・おろし金・搗鉢）、食べ物を入れる道具（ざる、曲物）、固体を移す道具（杓子）、液体を移す道具（片口鉢）、水や材料を貯蔵する道具（甕・壺）などが使われていた。12頁下段の写真は、料理屋の台所棚を復元したものだが、このように多くの台所道具を使っていたものと考えられる。上段左は、焼塩壺で生産地である和泉国の刻印がある。中段の土器ほうろく皿は昔のフライパンのような道具で豆などを煎るのに使った。手ほうろくは胡麻専用のほうろく（胡麻の刻印あり）



焼塩壺 堺 中期
小田原市欄干橋町遺跡 小田原市教育委員会



鉄製鍋
平塚市原口遺跡



曲物
海老名市社家宇治山遺跡



土器ほうろく皿 江戸在地系 中・後期
厚木市東町遺跡 厚木市教育委員会



おろし金
藤沢市No. 78 遺跡 藤沢市教育委員会



ざる
海老名市社家宇治山遺跡



木製杓子
海老名市社家宇治山遺跡



土器手ほうろく 江戸在地系 後期
海老名市社家宇治山遺跡



陶器搗鉢 瀬戸・美濃 前期
清川村馬場遺跡



包丁（木製柄は欠損）
藤沢市No. 78 遺跡 藤沢市教育委員会

であり、胡麻がはじけて飛ばないように袋状になっている。水鉢は、名の通り水を入れて、調理等に用いていた可能性が高い。蓋を受ける受け部が口縁内側にある。壺類は穀類・乾物・茶・調味料などを保存するのに用いられていた。



陶器灰釉片口鉢 瀬戸・美濃 後期
清川村馬場遺跡



陶器灰釉水鉢 瀬戸・美濃 後期
小田原城跡八幡山遺構群



陶器灰釉双耳壺 瀬戸・美濃 後期
相模原市小保戸遺跡



陶器鉄釉広口甕 肥前系
鎌倉市円覚寺旧境内遺跡



陶器壺 信楽
厚木市城際遺跡



陶器鉄釉甕 瀬戸・美濃 後期
茅ヶ崎市上ノ町遺跡



陶器甕 常滑
横浜市上行寺裏遺跡



当時の宿屋の台所復元
食器、調理具、貯蔵具が多量に置かれている
江東区深川江戸資料館

三、「住まう」

ここでは、調度品や家具を紹介するが、当時の^{たんす}箆笥や^{ながもち}長持が出土することはまず無いため、遺存しやすい陶磁器・金属製品・石製品が主体となる。写真上段から中段左は火鉢類である。染付の火鉢が多くなるのは近代以降で、江戸時代は土器のものが多い。中段中央は箆笥等の引き手と錠前。また花生も当時の調度品であるが、高価な製品も含まれる。しびん、唾壺は陶磁器製で、江戸時代後期から数が増える。



土器火鉢（瓶掛）後期
小田原城跡八幡山遺構群



瓦質土器火鉢 中期
小田原市中宿町遺跡 小田原市教育委員会



土器火鉢
藤沢市用田鳥居前遺跡



土器火鉢 江戸在地系 前期
清川村表の屋敷遺跡



引き手・錠前
小田原市杉浦平太夫邸跡



赤絵瓶（広義の柿右衛門）肥前系 中期
小田原市杉浦平太夫邸跡



陶器鉄釉花生
藤沢市No. 78 遺跡 藤沢市教育委員会



陶器しびん 瀬戸・美濃 後期
清川村馬場遺跡

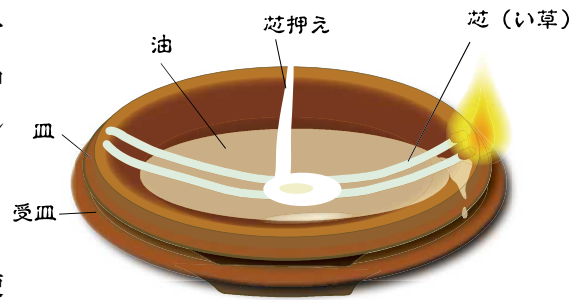


染付唾壺 肥前系 後期
小田原市杉浦平太夫邸跡 小田原市教育委員会

●明かりの道具

当時、明かりの道具として、様々な形態の灯火器が出土している。基本的には、右図のように菜種油と芯を使った灯明皿が基本であり、灯明皿の下に受け皿を入れ、垂れた油を皿に戻す役割をしている。灯明皿に芯を固定する突起をつけたひょうそくは、中央に突起があるものが多いが、二方向に燃焼部がつくもの（カンテラとも称する）や下部に瓶がつくものなどがある。ひょうそくは移動がしやすい、油が多く、油切れが少ないなどの利点がある。灯明皿もひょうそくも単独でも用いるが、^{あんどん}行灯や灯台に置いて使うことも多い。行灯に入れるときは灯明皿の下方に行灯皿を置く。ヒデ鉢は松の切材（ヒデ）を焚くことで明かりとするものである。

灯明皿の使い方



受皿はたれた油を受け、たまに皿へ戻す



陶器灰釉灯明皿・灯明受皿 信楽系 後期 横浜市原宿町遺跡



陶器鉄釉ひょうそく 瀬戸・美濃 後期 清川村馬場遺跡



陶器鉄釉瓶付きひょうそく 肥前系 小田原市欄干橋町遺跡 小田原市教育委員会



土器両口ひょうそく（カンテラ） 江戸在地系 小田原市欄干橋町遺跡 小田原市教育委員会



陶器雀ひょうそく 小田原市欄干橋町遺跡 小田原市教育委員会



陶器行灯皿 瀬戸・美濃 後期 横浜市本牧荒井横穴墓



火打ち石 ※火打ち金に打ち付けて使う 海老名市社家宇治山遺跡



芯押え ※使い方は上図参照 藤沢市No. 78 遺跡 藤沢市教育委員会



火打ち金 ※金がすり減ることで火花が起こる 清川村長福寺跡地



石製ヒデ鉢 清川村馬場遺跡

四、「装う」

ここでは身につける道具、化粧道具などを紹介する。武士の魂ともいえる日本刀は、少数出土例があるが、鐔つばもまれに出土している。履物は下駄の出土例がある。化粧道具については、椿油などの髪油を入れた油壺びんみずや鬢水という整髪料を入れ、櫛を浸して髪をすく鬢水入れが各所である程度出土する。お歯黒壺はぐるつぼは、お歯黒水を入れた壺であるが、成分である鉄分が内部に付着している。うがい茶碗はお歯黒で苦くなった口をゆすぐもので、外面は無文、内面に装飾性が高い文様を施す。下段中央は紅を入れる紅皿の裏面で「京都四条遍に平小町紅」と赤絵で文字が記されている。下段右は同じく紅を入れた合子ごうすで口縁に紅が残っている。笄こうがいは、もともとは髪を整える道具であったが、次第に装飾性が強くなった髪飾りである。ガラス製のものは数が少ない。



刀の鐔
逗子市池子遺跡群 逗子市教育委員会



下駄
海老名市社家宇治山遺跡



染付油壺 肥前系 厚木市城際遺跡他



陶器摺絵鬢水入れ 瀬戸・美濃 中期 厚木市城際遺跡他



ガラス製笄
小田原市欄干橋町遺跡 小田原市教育委員会



お歯黒壺 瀬戸・美濃
清川村馬場遺跡



色絵うがい茶碗 肥前系 前期 相模原市津久井城跡馬込地区



銅製手鏡 綾瀬市宮久保遺跡



紅皿 茅ヶ崎市上ノ町・広町遺跡 茅ヶ崎市教育委員会



紅入れの合子 (蓋は失われている) 肥前系 厚木市城際遺跡

五、「祈る」

祭祀具・信仰具を紹介する。神酒徳利は祠や神棚前に対で使われた物で、上段左の染付瓶についても同様の使い方をした可能性が高い。仏花瓶は、仏壇などに供えられた。仏飯器は、現在の仏壇にあるものと形状は大差がないが、染付の製品がよく出土する。藍釉に金彩を描いた上手のものもまれに存在する。香炉は、仏壇・寺院・石仏等の前で広く用いられたようで各所で出土例がある。りんはりん棒と共に現代でも仏壇によく備え付けられている。鉦吾は読経の際に鳴らす仏具。下段右は家内安全を記した御札。



染付松竹梅文瓶 肥前系 後期 清川村馬場遺跡



染付菊文仏飯器 肥前系 後期 海老名市社家宇治山遺跡



青磁染付香炉 肥前系 伊勢原市上粕屋・上尾崎遺跡



染付神酒徳利 肥前系 後期 清川村馬場遺跡



磁器藍釉仏飯器 肥前系 小田原市杉浦平太夫邸跡



陶器灰釉呉須絵香炉 瀬戸・美濃 清川村表の屋敷遺跡



染付仏花瓶 肥前系 伊勢原市上粕屋・上尾崎遺跡



銅製りん 藤沢市No.78 遺跡 藤沢市教育委員会



銅製鉦吾 藤沢市No.78 遺跡 藤沢市教育委員会



御札 家内安全等が記されている
藤沢市No.78 遺跡 藤沢市教育委員会

六、「学ぶ」

「学ぶ」道具は主に文房具が主体となるが、硯や硯に水を入れる水滴^{すいてき}は各所で出土例が確認されている。筆と墨は遺存しにくいいため、神奈川では出土例が少ない。水滴は、硯箱に入りやすいように方形の製品が多いが、円形・動物形のものも少量確認される。陶磁器製が多いが、まれに金属製のものがある（写真 小判型的水滴）。また携帯筆記具の矢立、石製印章、銅製の定規などもまれに出土している。



机で書き物をする 手習い五十三（部分）歌川豊国（三代）



硯 厚木市城際遺跡他



染付・白磁・陶器銅製水滴 清川村馬場遺跡他



石製印章 小田原市筋違橋町遺跡 小田原市教育委員会



銅製定規 清川村馬場遺跡



銅製矢立 厚木市東町遺跡 厚木市教育委員会

七、「遊ぶ」

江戸時代は様々な子ども向けの玩具がつくられるようになる。人形・独楽・羽子板・刀・舟・ままごと道具・碁石・土笛・箱庭道具などが出土品として確認されている。泥面子は紙のメンコの祖型ともいえるもので、人物の顔をかたどった芥子面と紋様をかたどった面打に分かれる。神奈川県では前者の方が多い。人形は土製のものが多く、多くが江戸で作られたも



今戸焼（江戸在地系と表現）の人形をつくる
江戸じまん名物くらべ 今戸のやきもの（部分） 歌川国芳



泥めんこ他 江戸在地系 平塚市神明久保遺跡他



土製人形 江戸在地系
小田原市杉浦平太夫邸跡 小田原市教育委員会



ままごと道具 海老名市社家宇治山遺跡



木製刀形 海老名市社家宇治山遺跡



土製裸人形 江戸在地系 鎌倉市西御門東やぐら群



土製人形・土笛他 横浜市原宿町遺跡他



羽子板（柄は失われている）
海老名市社家宇治山遺跡



木製舟形 海老名市社家宇治山遺跡



天保通宝をかたどった皿
藤沢市No. 78 遺跡 藤沢市教育委員会

のである。図示した浮世絵のように今戸焼の人形はその代表格といえる。人形は愛玩的な童子や福助などの招福人形、動物、神様などが多かったようである。18 頁下段右は天保通宝を重ねたようにあしらったミニチュア皿。

成人の趣味・遊び・嗜好の道具として植木鉢、鳥餌入れ、茶道具、喫煙具を取り上げた。植木鉢は陶磁器製と土製のものが出土している。鳥餌入れは筒型の陶製小鉢に摘み部がつくもので摘み部を鳥かごにかけて使用した。園芸や鳥の飼育は江戸を中心として流行したが、神奈川のような郊外でもその影響は受けたようである。中段右は茶釜をかける風炉の一種と考えられる。火入れと灰吹きは共に煙草盆にいたもので、灰吹きは煙管を打ち付けた痕が口縁に残る。



染付植木鉢
藤沢市No. 78 遺跡 藤沢市教育委員会



陶器鳥餌入れ 瀬戸・美濃 後期 葉山町三ヶ岡遺跡他



瓦質土器火入れ 清川村馬場遺跡



陶器灰釉植木鉢 瀬戸・美濃 後期
相模原市津久井城跡馬込地区



陶器天目碗 瀬戸・美濃 前期 海老名市社家宇治山遺跡



土器風炉 京都
小田原市杉浦平太夫邸跡 小田原市教育委員会



陶器建水 逗子市池子遺跡群 逗子市教育委員会



陶器灰釉植木鉢
小田原市杉浦平太夫邸跡 小田原市教育委員会



陶器灰釉灰吹き 相模原市川尻遺跡



銅製煙管 清川村馬場遺跡

八、「働く」

「働く」道具としては、農具・工具・鍛冶道具・漁具・商い道具などを紹介する。「働く」道具は、民具研究では多くの道具に分類されるが、木製が主体となるため、出土品としては少ない。農具では鍬・石臼・鉈・鎌などが確認されている。工具としてはのこぎり、ノミ、刀子(ナイフ)、鉄篋、錐、また商い道具として秤のおもり、漁具としては土製の網のおもりや釣針などが出土している。鍛冶道具は写真に示したように取瓶や坩堝、ふいごの羽口などが出土している。共に写っている小型の玉は鉛の鉄砲玉であり、坩堝で溶かして型に流し込んだと考えられる。



石臼 相模原市津久井城跡馬込地区



木製鍬頭
小田原市筋違橋町遺跡 小田原市教育委員会



天保通宝・寛永通宝
清川村北原遺跡



へら・ノミ・鋸・刀子 海老名市社家宇治山遺跡他



取瓶・坩堝・鉄砲玉 ※坩堝は金属を溶かす際の容器
海老名市社家宇治山遺跡他



秤のおもり
厚木市東町遺跡 厚木市教育委員会



鉈・鎌 清川村馬場遺跡



ふいごの羽口 ※空気を鍛冶炉に送る管
横浜市上行寺裏遺跡



土錘 葉山町三ヶ岡遺跡

II部 遺跡の種類と道具の違い

一、城内の道具

小田原市にある小田原城は、後北条氏の後、譜代大名の大久保氏などが城主として入城した。相模国では唯一の五万石以上の大藩であり、城は規模も大きく、城下町は東海道の拠点としても賑わっていたという。城内における道具の出土事例として小田原城三の丸藩校集成館跡第Ⅲ・Ⅳ地点をとりあげる。

藩校集成館第Ⅲ・Ⅳ地点は平成5・6年に広範囲に発掘調査されている。小田原城内の三の丸にあたるが、有力家臣の屋敷や藩校・藩役所があったと推定されている。瓦が多く、武士の居住・藩校があったせいか硯・水滴・筆置きなどの文具が多い。ふすまの引き手

や火薬を練ったともいう煙硝播りなども散見される。身分の高い者にしか使用されなかった盛期の鍋島焼が出土している。井戸が多いため釣瓶が複数、発見されている。



軒丸瓦・軒平瓦



硯



ふすまの引き手



色絵蘭文皿 鍋島 中期 (松井久撮影, 右も)



染付桜樹文皿 鍋島 中期



牛形筆置き



染付貝形水滴 肥前系



焰硝播り 瀬戸・美濃

二、関所の道具

関所の道具の出土事例として箱根関跡をとりあげる。箱根町にある箱根関所は元和五年（1619）に東海道の関東への入り口を監視するため設置され、それは幕末まで維持された。

国指定史跡である箱根関跡の復元整備事業に伴い、平成11年～18年、断続的に発掘調査が実施された。出土品をみると鉄砲玉（火縄銃と洋式銃用）などの特殊な道具があるが、武具などはあまり確認されていない。食器が多めで、前期～後期の製品が継続的に使われている。喫煙道具である灰吹きも出土している。現在の関所建物内の復元人物の様子のように平時においては、役人や足軽たちが飲食・喫煙を繰り返し、そのような道具が廃棄されたのであろう。総じて出土品は少なく、廃棄物の大半は関所が面する湖畔^{こはん}へ投げ込まれたと考えられている。また、関所の施設構築の石割に使ったと推定される鉄製ノミが出土している。



箱根関所全景



箱根関所内部復元人物



鉄砲玉（左は洋式）



染付花文碗 肥前系 後期



発掘調査の状況



染付碗 肥前系 前期



染付鶴文碗 瀬戸・美濃 後期



陶器皿 肥前系 中期



陶器火鉢



陶器灰吹き



陶器爛徳利



鉄製ノミ

三、陣屋の道具

からすやま 烏山藩厚木役所は栃木県のなすからすやま那須烏山市にあった烏山藩の飛び地である相模国領（約一万石）を統治するための陣屋である。厚木市の相模川畔の旧市街の中心部に位置しており、慶応三年（1867）の大火で焼失したが、明治初期までは機能していたという。平成3年再開発に伴い、発掘調査が実施されている。調査内容については不明な点が多いが、現在、確認できる出土品を見ると陣屋の遺物として特殊な内容だった。まず陶磁器については揃いの碗・皿・鉢が多い。おそらく、宴会・供応用だったのだろう。またとくるま戸車・釘類が多く含まれており、大型のものも確認される。規模の大きい建物の建築材と考えられ、戸車には「文政八年旧正月」の墨書のものも含まれる。また炭化した多量の米が出土しており、貯蔵していた米が慶応の大火で焼けたと考えられる。



烏山藩厚木役所発掘調査状況



磁器戸車



染付丸文小鉢 肥前系 後期



ふいごの羽口



染付小皿 瀬戸・美濃 後期



硯



炭化米



多量の釘（ほとんど被熱 慶応の大火によるもの）

四、宿場の道具

藤沢市にある旧藤沢宿は、東海道の六番目の宿場町であり、江ノ島・鎌倉への参詣の入り口にも当たっていたため非常に栄えたとされている。江戸時代中期以降は、時宗の総本山遊ゆぎょうじ行寺（右浮世絵上方の寺院）の門前町でもあった。平成19年～21年に宿場の一部が調査され、多数の遺物が出土した。宿場の遺物としてとりあげてみたい。

食器については陶器より磁器が圧倒的に多い。色絵など高価なものが含まれる。器の種類が非常に多岐にわたり、物量も多い。磁器製の油徳利や植木鉢など、神奈川ではあまり目にしない器が含まれている。遊具も多く出土する。



藤沢宿の様子 東海道五十三次之内 藤沢 (部分) 歌川広重 (初代)



赤絵花文碗 肥前系 中期



水引箱蓋 祝いの品等をいれたものか 文化十二年 (1815) に当該地の商店 (又は支店か) が開業したことが記されている



染付渦巻き文油徳利 瀬戸・美濃 後期



陶器摺絵水注 瀬戸・美濃 中期



染付山水文大皿 肥前系 後期



染付植木鉢 瀬戸・美濃 後期



ままごと道具



色絵梅花碗 肥前系 中期

五、寺院の道具

愛甲郡清川村にある宮ヶ瀬遺跡群では、宮ヶ瀬ダム建設に伴う発掘調査で、旧宮ヶ瀬村の唯一の寺院だった長福寺の遺構が発見されている。注目されるのは、境内から梵鐘^{ほんしやうちゆうぞう}鑄造遺構が発見されたことである。文献から長福寺には元文五年(1740)銘の鐘があったことがわかっており、その鐘を鑄造した跡と考えられる。出土品としては、やはり仏具が目立ち、銅製の風鈴^{ふうたく}・風鐸^{ぜつ}の舌や陶磁器製の仏飯器・仏花瓶が出土している。碁石などの遊具や喫煙具・茶道具の水指に使われた可能性がある二彩手^{にさいて}の唐津の甕も出土しており、仏事のあい間にいろいろな余暇の過ごし方をしていただと想定される。



梵鐘鑄造遺構



染付雨降り文仏飯器 肥前系



金銅製風鈴舌・飾り金具



銅製延煙管



青磁仏花瓶 肥前系



陶器二彩手甕 肥前系 中期



碁石



梵鐘の型の一部(蓮弁の撞座)



硯



銅製風鐸・鉢

六、農村の道具

伊勢原市に所在する東富岡・北三間遺跡は、平成2～5年にかけて調査され、近世では竪穴状遺構や掘立柱建物などが発見された。部分的であるが当時の農村の姿が確認された事例である。出土品をみると量的には少なめで、食器は碗などの実用品が多く、粗製の染付や陶器類が多い。写真中央にあるように染付碗もゆがんだものが確認される。器の種類も少ないが、灯火器、調理具、化粧具（髻水入れ）や信仰具は少数ながら存在する。仕事道具である石臼や砥石などが多く、調理具である鉄鍋、真鍮製の匙も出土している。



伊勢原市東富岡・北三間遺跡 近世面（部分）



陶器灰釉碗 関西系 後期



染付皿 肥前系 中期



茶臼



陶器摺絵鉢 瀬戸・美濃 中期



染付碗（右のものは歪んだ製品）肥前系 後期



陶器刷毛目碗 肥前系 中期



砥石



錐・匙



陶器灯火器



焼き継ぎされた碗（ヒビの部分）「萩市」朱書



焼き継ぎされた爛徳利「上角」朱書



焼き継ぎされた碗「大清吾」朱書

トピックス① 茅ヶ崎における焼き継ぎ師の活動

茅ヶ崎市の北部に位置する上ノ町・広町遺跡では、2区2号溝を中心に多くの焼き継ぎされた陶磁器が出土し、その分析から当時の焼き継ぎ師の活動を示す資料であることが明らかになった。焼き継ぎとはガラス粉末を焼いて割れ物を接合するもので、江戸時代後期に焼き物の修理業として繁盛したという。出土した焼き継ぎ資料の四割に文字が記され、同一筆跡ですべて朱書きであった。注目されるのは、朱書き文字の内容で、出土地周辺の大体2～5km圏内の大字地名+人名の組み合わせが大半である（例えば「萩市」は萩園地区の市某）。つまり出土地近くで営業していた焼き継ぎ師が各地区をまわって割れた焼き物を集め、目印（朱書き）を書き入れ、修理していたことがわかるのである。



瀬戸物焼き継ぎ職人 守貞漫稿から割れた焼き物を集めてかごに入れている



茅ヶ崎市上ノ町遺跡出土陶磁器の朱書に示された地名（大村・石倉 1997 を改変）



焼き継ぎされた碗「岡又」朱書



焼き継ぎされた皿「田作」朱書



焼き継ぎされた碗「田仁」朱書

トピックス② 平塚の「塚」と問屋場墨書陶器

平塚市については、一説によると平塚四丁目にある寺ノ脇古墳がその地名の起源といわれている。塚の上が平らだったからということだが、地元ではかなり広く知られた伝承のようである。平成4年、寺ノ脇古墳周辺の確認のため、発掘調査が実施されたが、残念ながらその際は、古墳関連の遺構は確認できなかった。しかし、その代わりに、平塚宿に関わる可能性が高い江戸時代の遺物が出土した。特に裏面に「西町問屋場」と墨書された十八世紀の瀬戸・美濃製の陶器香炉は興味深い資料である。問屋場は、宿場で人馬の継立などの業務を行う場所で、平塚には西・東の2箇所があった。西の問屋場は実際には、出土地から約150 m離れているが、その活動が考古資料で裏付けられたといえる。



寺ノ脇古墳



「西町問屋場」墨書陶器 平塚市教育委員会
写真と実測図 ※実測図は宮ノ脇遺跡報告書から転載



トピックス③ 江戸時代の絵入り 百科事典と往来絵字引

江戸時代について、当時の道具の種類や使い方の詳細は意外と分かっていない。近世の出土品を分析するにあたり、大きな手助けとなるのが、江戸時代の絵入り百科事典や絵字引である。元禄三年（1690）刊行の『^{じんりんきんもうずい}人倫訓蒙図彙』や正徳二年（1712）頃、編纂された『^{わかんさんさいずえ}和漢三才図会』などが知られている。嘉永六年（1853）成立の『^{もりさだまんこう}守貞謾稿』は江戸時代後半期の風俗をよく伝えているため、考古資料の分類や用途解明によく用いられている。また幕末に成立した『商売往来絵字引』のような絵入りの往来物も大いに参考になる。



守貞謾稿

平成 25 年度かながわの遺跡展・巡回展

地中に埋もれた江戸時代の道具たち—かながわの町と村の暮らしぶり—

発行日 2013 年 12 月 26 日

編集 神奈川県教育委員会 教育局 生涯学習部

文化遺産課 中村町駐在事務所（神奈川県埋蔵文化財センター）

〒 232-0033 横浜市南区中村町 3-191-1

TEL 045-252-8661 FAX 045-252-8663

発行 神奈川県教育委員会

印刷 黒澤デザイン事務所

